

西宮歴史調査団通信 2013年4月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

平成25年3月9日(土)に、西宮歴史調査団の「平成24年度活動報告会・平成25年度団員登録会」がおこなわれました。今回の報告会には36名の参加があり、そのうちの半数は調査団員以外の方で占められ、一般の方にも広く活動内容を知ってもらうことのできる機会となりました。また、兵庫県教育委員会の文化財担当の方にもご参加いただきました。

博物館等では、様々な館活動のためにボランティアの方のご協力をいただいていることが多いですが、西宮市のように文化財調査をおこなうボランティアというケースは珍しく、その点でも非常に注目されました。今後の調査団活動に大きな期待がよせられています。

平成25年度は、調査団として8年目にあたります。今回の活発な報告を受けて、また新たな団員の方を迎えることとなりました。市内の調査対象はまだ数多くありますが、今年度も各班それぞれペースで活動をおこなっていただけらと思います。今年度もよろしくお願いたします。

報告会では、まず団長から調査団活動全体について報告がありました。平成24年度は、橋梁班・石造物班が活動を継続し、古文書班が新たに活動を始めています。11月に実施した現地解説会「甲東村を歩く」を始め、毎月の定例会でも老松古墳や名塩八幡神社の秋祭、西宮砲台の見学に行くなど、調査団全体で外に出る機会が多くなり、充実した活動を行いました。報告会に合わせて平成24年度調査団活動報告パネル展を実施しています。各班ごとに特色あるパネルを作成し、郷土資料館の展示室前にて展示しています。(文責・福庭万里子)



→団長報告←パネル展

多彩だった活動を報告

橋梁班の発表
調査団立ち上げ初年度より活動をおこなってきた班です。西宮市内にかかる橋の悉皆調査を進め、報告会ではこれまでの成果を紹介しました。河川の流れに沿って市内全域を少しずつ移動しながらの調査は大変なことも多いようですが、着実な記録が進められています。



古文書班の発表
活動開始から1年で、西宮市所蔵の西宮町宗門人別帳の翻刻をしています。平成24年度は全体449冊のうち10数冊を終えることができました。報告では、現状での統計結果や、家族構成の記録から当時の生活の一端が読み取れる面白さなどが話されました。



石造物班の発表
市内の石造物を計測・銘文の記録等により調査しています。平成24年度は西宮神社での調査をおこないました。報告では、句碑の内容や、1年間同じ神社の中で調査していたからこそのわかる石造物の変化などについて紹介しました。



西宮歴史調査団通信 2013年 5月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX0798-33-1799

調査団 始動!

西宮歴史調査団の
新年度の活動がスタートしました。
西宮市郷土資料館
で平成25年4月13日
に初顔合わせ。団長
に川上早苗さんを再
任しました。ことし
も「橋梁班」「石造物
班」「古文書班」の3
班で活動します。メ
ンバーと主なテーマ
は下記のとおりです。

石造物班

西宮神社に所在する鳥居や灯籠などの石造物について、計測や銘文の記録などの作業をおこないます。

今年も西宮神社の石造物を

リーダー	原田 孝一
"	栗野 光一
	新井 栄一郎
	荒木 知
	石田 規矩子
	石本 道子
	梅木 弘道
	小川 泰代
	田中 邦彦
	田中 賢治
	益田 健司
事務局	俵谷 和子
	森下 真企

古文書班

活動2年目の班で、旧西宮町の宗門帳に記載された住民の名前・年齢等を記録する作業をおこなっています。

宗門帳、2年目にいどむ

リーダー	高谷 康彦
"	多々良 さゆり
	川上 早苗
	川口 勝行
	倉田 克彦
	野川 至
	藤田 岩夫
	南 好廣
	横山 忠範
事務局	衛藤 彩子
	福庭 万里子

橋梁班

今年から北部へ本格進出します。悉皆調査終了まで残り二十数河川、山越えにめげずゴールを目指します。

いよいよ西宮北部の橋へ

リーダー	小西 貞一郎
"	高橋 博己
	倉田 克彦
	衣笠 周司
	清水 貞夫
	多々良 さゆり
	田中 賢治
	橋爪 里美
事務局	早栗 佐知子
	細木 ひとみ

この本を皆さんに読んでもらおう!

西宮市立郷土資料館で販売

たいですね。(1冊500円)

「西宮の地蔵」が発刊されました。西宮歴史調査団の報告書として「甲山八十八ヶ所」に続く第2弾です。市内215ヶ所の地蔵を発見、調査したもののまとめです。

土地を掘り起こしたら戦災で亡くなった人が埋まっていたので申す意味で地蔵を祀ったとか、「阪神大震災のときにお地蔵さんの祠は倒壊したが、我が家はこの付近では一軒だけ無事で、お地蔵さんのお陰だ」など、貴重な聞き書きも収録されています。こうした苦労と研鑽の結晶であるこの報告書を、市民の皆さんに読んでいただくようPRしたいですね。

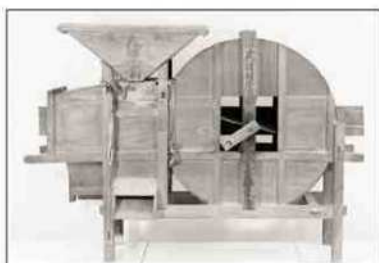


「西宮の地蔵」表紙

西宮歴史調査団
西宮の地蔵
調査報告書第2集
発刊!

西宮歴史調査団通信 2013年6月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799



広田の京屋治兵衛が製作した唐箕

郷土資料館所蔵の農具の中には、「京屋」の名前が墨書された唐箕7点と万石とおし4点があります。この「京屋」は、民具研究者にとって研究テーマの宝庫で、近畿一円に点在する京屋製の唐箕の形や変遷などが研究されており、農具商の中でもとて有名な一族です。また、『農人橋式丁目』や『農人橋詰町』の水帳(検地帳)などから、江戸時代には農人橋周辺を拠点とし、農具商として活躍していたことがわかっていきます。京屋の農具は各地で一流品として使われていたのです。

「広田の唐箕職人京屋治兵衛」展

市民ギャラリーに作品を見に来たので、郷土資料館の展示室も見ようと思ったら、常設展示されている唐箕に「大社村廣田 本家京屋治兵衛」と書いてあったので私の祖父だと教えて下さったとのこと。これには本当に驚きました。15年ほど前、お話を伺いたかった「京屋治兵衛」の子孫の方が目の前にいるのですから。

残念ながら、祖父の京屋治兵衛は、生まれる前に亡くなっており、「農人橋」でどのような仕事をしてきたのか、「なぜ広田にきたのか」

ところで、館蔵の唐箕2点と万石とおし1点には「大社村廣田 本家京屋治兵衛」と記されており、「大坂農人橋の京屋が広田でなぜ農具を製作していたのか?」「いつ広田に来たのか?」などと疑問がわきます。

そこで、花岡佳代氏(元郷土資料館職員)が、広田の京屋治兵衛について聞き取り調査を行いました(この成果は、花岡佳代「西宮における唐箕・トオシの製作者―京屋

「それは私のおじいちゃん!」

展示「広田の唐箕職人京屋治兵衛」を開催することができました。私は普段から、村の古老たちから生活風習や伝承などを聞いて、少しでも後世に残したいと思っています。しかし、もともと苦勞するのが、語り部となる「人」を探すことです。京屋治兵衛の孫である、山本堅治さんとの出会いは「不思議な力」を改めて実感するものでした。これからも「知りたい!」と思ったときにはすぐに行動し、どんな情報も逃がさないように強力なアンテナをはっていきたく思います。(細木ひとみ)

展示「広田の唐箕職人京屋治兵衛」を開催することができました。



展示を見て名乗り出て来られた山本堅治さん(平成25年3月)

西宮歴史調査団通信 2013年7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

古文書班の報告

祝日に季節の移ろい

★……………川口 勝行

国民の祝日は年間15日あるが、「春分の日・秋分の日」の期日は予め決まっていないうこと最近になって知った。いつ・だれが決めているのだろうか？ 国立天文台が毎年2月1日に「暦象年表」を発表しているようだ。

そこに、春分の日・秋分の日が記載されているのである。

今の私たちの生活の中では失われつつある二十四節気・雑節等が含まれている。先人たちのならわしを偲び、季節の移ろいを少しは感じてみようと思っている。

後世に伝わった間違い

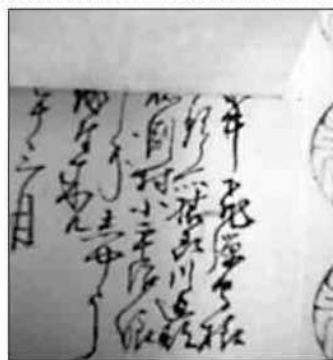
★……………倉田 克彦

宗門帳は住民の身分を証明する文書でした。それに間違いがあれば、どうなるのでしょうか。

借地して一家を構えている座古屋小八の娘「くま」と「くに」が倅（せがれ）に、同じく借地人の木津屋平次郎の妹「みつ」が弟になっているのです。しかも、確認の印判が一年分押されています。

誰も気付かなかつたのか、気づいても、よくある事、子であることに変わりはない、翌年に直せばよい、実害がない等で問題に仕上がったのか、いすれにしろ訂正されなかつたのです。

些細な間違いを話題にしてと、宗門帳の書き役はばやいてあることでしょうか。



淵の新字体は測でCの旁には写真の様にリトウがある。また付箋で判らないBは隣の部分が者となんとか訓める。

地図でみると猪淵は多田銀山の近くだが、辺鄙な所だ。川邊郡の山奥と海辺の武庫郡西宮濱とどういう縁があったのだろうか。

なんと広い川邊郡

★……………荒木 知

熊内(クモチ)屋後家の跡取りに嫁が来た。

「A井飛騨守様
B C村小平治娘(略)
緑付来ル」

|| 写真参照

はこの村か？

熊内は新神戸駅の辺りだが兎原郡である。摂津国名所大絵図を見ると川邊郡は茅渚海から丹波国境までの村数240の摂津最大の郡である。角川

書店の日本地名大辞典兵庫県版でも村数193とある。

通婚圏から考えて、近くの尼崎市57村の内旧立花村11村(大字)から調べた。該当なし。残り46村もダメ。ついで伊丹市50村。宝塚市20村。川西市35村も出てこない。最後の猪名川町31村の旧中谷村の猪淵(イブチ)村が高槻藩預かり地とある。安政5年の高槻藩主の永井直矢は飛騨守を名乗っている。

西宮歴史調査団通信 2013年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799



津門稲荷山、津門大塚山、上ヶ原車塚

西宮に前方後円墳があった？

西宮では関西学院構内古墳や八十塚古墳群などの古墳がよく知られていますが、ほとんどが丸い形をした円墳で、古墳の横から墓室にはいれるようになっていきます。前方後円墳は教科書や写真でよくみる鍵穴の形をした大きな古墳です。有名なものとし

ては箸墓古墳や仁徳陵古墳などがあります。その「前方後円墳が西宮に？」と疑問がでるのも当然です。なにせ西宮でそのような古墳を目にしたことがありません。一体どこにあるのだろうか、いつつくられたのだろうか、そもそも古墳って何なのだ。

古墳は昔の人のお墓なのですが、現在のお墓とは違います。ひとつつくるのにも大規模な土木工事が必要で、みんながみんな古墳をつくれるわけでもありません。古墳をつくるための労働力を動員できた者でしか古墳で眠ることはできません。このような古墳とよばれるお墓が3世紀後半から7世紀前半にかけて全国的につくられました。そこで、この時期を古墳時代とよんでいます。しかし、古墳時代とつても、古墳ばかりつくっているわけではありません。むしろ、古墳時代の大多数の人々にとっては古墳づくりは非日常的なことで、ムラをつくらせて、農業や漁業などで生計をたてて、子育てをして、生活していたのかもしれない。そう考えると、大多数の一般人は現在とそれほどかわらない日常生活を送っていたのかなあと、親しみもわきます。

さて、西宮の前方後円墳ですが、津門稲荷山古墳、津門大塚山古墳、上ヶ原車塚古墳という3つの前方後円墳があったことがわかっていきます。現在は墳丘とよばれる土盛が失われているため一つも確認することはできません。しかし、紅野芳雄さんの大正から昭和にかけての踏査記録「考古小録」に前方後円墳のスケッチが描かれて、吉井良秀さんが明治から大正頃の車塚古墳の様子を書いた記録が残されていたことから、西宮にも前方後円墳があったということがいえるのです。

(森下 真企)



紅野芳雄「考古小録」(西宮市立郷土資料館)

西宮歴史調査団通信 2013年9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

進む橋の架け替え

★：橋梁班小西貞一郎
久出川が夙川に合流するすぐ手前の越木岩筋に架かる橋は、昨年片側の親柱、欄干が取り外され、川の一部に蓋をして拡張し、自動車等がゆつたりと侵入できる道路になりました(写真①参照)。

一昨年調査した中新田川も夙川に合流する直前に阪急電車の苦楽園口駅があり、現存する石刳橋から阪急電車の線路までは約百



片側の親柱、欄干が無くなった久出ヶ谷橋



石刳橋から苦楽園口駅を望む



親柱がモニュメントして橋の横に残されている

親柱がなくなる?!

「石刳橋」と呼ばれていたそうです。

時期は未確認ですが、阪急甲陽園線の開通、駅前の整備に伴い新しく苦楽園口橋となり、その手前の支流である中新田川に架かる橋にその名を残しているもの

ない状態で道路になったり、駐車場・駐輪場になったりしてきています。

一方、老朽化に伴い、橋の架け替えが順次進められています。その架け替え時に、これまでの石やコンクリート製の親柱は再現

でいけません。八月の定例会の日に神戸新聞の取材を受け(八月十八日の朝刊に掲載)、その時に述べましたように橋の架け替えが進んでいる事でもあり、調査は出来るだけ早くしなければならぬのですが…。

メートルに渡って暗渠となり、駅前の広場や駐輪場になつていきます(写真②参照)。

余談ですが現在夙川に架かっている阪急苦楽園口すぐ北側の苦楽園口橋は元々

と思われず。因みに「石刳」はこの付近の町名です。この様に各地で特に小さな川は蓋をされた形となり、これまで有った橋も無くなり、川の存在すら解ら

ます(写真③参照)。

今年度の橋の調査は猛暑のために進んでいません。八月の定例会の日に神戸新聞の取材を受け(八月十八日の朝刊に掲載)、その時に述べましたように橋の架け替えが進んでいる事でもあり、調査は出来るだけ早くしなければならぬのですが…。

されず橋の名称・川の名前・架橋年月日等が書かれた親柱に代わるアルミ製のプレートが欄干に取り付けられるスタイルに変わっていく橋が多く見受けられます。

夙川駅すぐ南の羽衣橋の

西宮歴史調査団通信 2013年10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

2006年に再建された西宮神社の赤門前の大鳥居



石造物班からの報告 栗野 光一

石造物班は西宮神社で石造物の調査を継続しています。肌をも焦がす暑い暑い今年の夏は、高齢者にとってはしんどい夏ですが、適度に手抜きをしつつ？調査を行っています。真夏の拓本採りにも挑戦をしています。右下の写真は、えべっさん筋に面した自然石

に刻まれた句碑の拓本を採っている光景です。



西宮神社あれこれ

赤門前大鳥居の秘話

西宮神社は先の大戦末期に空襲を受け、本殿などは焼失したが、赤門前に建立された大鳥居は赤門と共に耐え凌いできました。5年の阪神淡路大震災で倒壊の憂き目に遭いました。その大鳥居が11年振りに2006年12月15日に再建されました。

寄進者は芦屋市で被災した「藤原あつ恵」さんで、藤原さんは紋付きの着物を用意し15日に予定されていたが、体調を崩し新しい大鳥居を見ることなく7日に他界されました。藤原さんは大阪市で育ち、地元のえびす神社

に良くお参りをされていたと言います。芦屋市でマンションやアパート経営を始めてからは西宮神社へは良くお参りし「えべっさん」は自分の守り神と言っていました。しかし震災で多くの物件を失い、遺族は「アテレコ」では崩れた大鳥居の映像が繰り返し流された。それまで積み上げてきたものを一瞬でなくした自分とダブらせて見ていたのではないかと振り返っています。

その後、藤原さんは西宮神社と相談の上、自らの蓄えを大鳥居の再建に充てることを約束されました。新しい大鳥居の支柱には藤原さんの字で「芦屋藤原あつ恵」と刻まれています。

遺族は「商売を助けてもらったえべっさんに少しでも恩返しすることが出来て本人も喜んでいました」と話していました。(出典/参考：2006年12月15日朝日新聞)



大鳥居の支柱に刻まれた寄進者名と建立日

廣田神社の 浜の南宮神社の狛犬
神社には神様をお守りする雄と雌一對の狛犬が居ます。ご存知のように、ここ浜の南宮神社の雌の狛犬は大変珍しい「子連れ」です。一度ご覧下さい。
ところで西宮市内の神社で、私(栗野)が知る限り他にも一箇所、子連れの雌狛犬が居る神社があります。ご存知でしょうか？
探索をして見て下さい。

西宮歴史調査団通信 2013年11月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

すべての戸に屋号があった

きこまれている。

このたび初めて「宗門帳」の現物を読むことになった。この「宗門帳」は、宗門改めの方法として、最終的に「宗門人別改帳」として確立したものであり、明治初年まで約200年も続いたもので、2冊作成され、奉行所と村や町の役人の手許に残されたものであった。しかもそれは毎年作成されたものであった。

1戸単位に檀那寺と戸主や家族の名前・性別・年齢が書

古文書班からの報告

面白い記述を見つけて歓声！

刀」を許し、一部例外を除いて町人には公式に苗字(名字)を名乗ることを許さなかったの、明治になって、いわゆる苗字必称令(1875年)がでるまで、町人は苗字なしによばれていたものと思っていた。

このように屋号が全戸に付されているとすれば、今日の「氏名」とほとんど同じといわねばならない。ただ名字は基本的に、先祖を共通にする子孫の家々が共通に用いるものであり、特定の1軒のみを示すものではない。しかし屋号でも家を創設した先祖のもの

たり、いわゆる「のれん分け」によって名乗ったりすれば、「苗字(名字)」と同様な機能をもったに違いない。

ちなみに、39軒の屋号は23種に及ぶものの、2軒以上で使われているものが6種あった。(記載順・数字は使われている軒数)。

- 播磨屋(2) 當舎屋(2) 座古屋(7) 出屋鋪屋、升屋、木津屋、辻屋、伊丹屋、常念屋(6) 小柄馬屋、加茂屋、三沙屋(2) 丹波屋、難波屋、今津屋、井筒屋、辰屋、大和屋、成尾屋、和泉屋(3) 用海屋、中田屋、葭屋

(藤田岩夫)

同人異字であったり 同名異字であったり

以前、人口に関する中間報告にもならない途中経過を発表したが、宗門帳を読んでいく過程で崩し字や程度よく付録で掲載されているインデックスのようなものを作ってはどうかと思いついて集めてみた。途中経過のものばかりで中途半端に終わらせない自戒もこめて少し書いておくことにする。

年齢の数字、続柄、屋号なども考えられるが、変体かなで読みにくく、同じ名前(発音)や同じ人でも違う文字が使われていたりして種類が多い女性名で作って

やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ
やえ	やえ	やえ	やえ	やえ	やえ

かな文字、もとの漢字、宗門帳の変体かなを並べてみる。これがある程度まとまってきた、いい検索の方法があれば、読解時の多少の手助けになるのではとの期待をこめて。(高谷康彦)

現在の活動は、他班がひたすら計測をするように、宗門帳をひたすら筆写している段階である。ただ黙々と：と思いきや、面白い記述を見つけては思わず歓声を上げる班員を見て、小さくとも成果が出ている実感はある。私も思わぬ記述を密かに楽しんでる。

例えば、男女問わず、ほぼ同年齢の数人が同じ名であることがある。彼らが生まれた頃に、芝居や本などでブームとなった名があったのだろうか。いずれ調べたい。

また、天保五年「浄土宗宗門帳」には「夫」という続柄が出てきた。当主は越水村泉福寺檀那家の権屋ひな(三十四才)。女性当主は自ら宗門帳へ押印できないため、代わりに但馬屋忠七が押印している。同居人は夫・為吉(三十七才)、娘・とく(十四才)と、一見何の変哲もない家族。婿養子でも男性を当主とするのが一般的ななか、まだ三十代の為吉ではなく、代判人が必要な女性を当主としての役目を果たせなかったからか。宗門帳のデータが集まり、年を追って家族の変遷を確認できるようになれば理由も分かるかもしれない。

(古文書班担当・衛藤彩子)

西宮歴史調査団通信 2013年12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

市内最長の新生瀬大橋

わたれた橋、まさに長大な新生瀬大橋が架かっています。
これまで調査してきた橋は川の兩岸をほぼ一直線に結ぶように架かる構造物でした。

西宮北部を流れる武庫川に架かる橋調査の為、宝塚駅から川の右岸を上流に向かって進むと程なく生瀬橋があります。その上流に防音壁に覆



しかしこの橋は、その武庫川を無視するように生瀬橋の東詰から左手に大きく延びて、その先は山裾の中に隠れて見えません。上の地図からも判るように、川のみならずJR福知山線までも呑み込むように架かっています。
だから、左岸、右岸の感覚がなく、最初に見た時は自動車専用の橋かと思いましたが、橋は上下二車線の自動車道に



加え、下流側のみ歩道があります。
橋の左岸側は生瀬橋の東詰から、森興橋近くまでありますから、その長さは七百メー

トル近くあるでしょうか。
歩道を上流に向かって少し進むと、親柱と云うより壁に橋銘板「しんなませおおぼし」があり、反対の上流側に銘板はありません。更に進むと橋の側壁に出入り口が設けて



あり、階段が設置されています。
右岸上流の側壁に橋銘板「新生瀬大橋」とありますが、歩道側には銘板はありません。ともかく長い橋でした。

文・写真・編集=橋梁班 高橋博己

西宮歴史調査団通信 2014年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

奥が深い西宮神社… 石造物班からの報告

国道43号に向って建つ南門は、平成3年(1991)7月に復興されたと言う銘の復興記念碑が南門のすぐ北側に在ります。その屋根瓦には「さすがえべっさん」と吹出したくなる飾り物?が在ります。これは西宮神社の遊び心でしょうか?

当初のえべっさんは漁業の神さんで、昔から西宮神社の御神影(おみえ)には、にこやかな顔のえべっさんが左手に大きな鯛を抱えている図柄が描かれています。後に商売

[さすがえべっさん!!]



繁盛の神さんとして信仰を集め今日に至っています。

(写真・文||栗野光一)

その鯛が留蓋瓦として飾られていますので一度ご覧下さい。

鯛の後方の隅瓦には、「平成七年修□」との陽刻が読み取れます。

という事は門自体の復興よりも、4年遅れで瓦が葺かれたという事になるのでしょうか?

いずれにしても西宮神社は奥が深く、興味の湧く神社です。

えべっさん筋と親しみを込めて呼ばれている西宮神社表大門(通称赤門)前の県道西宮港線、表大門から北方向へおよそ50m、比較的珍しい円筒形の玉垣が途切れた所に設置されている高さ3・40m、幅・奥行きともに0・60mの石碑の北面に右の銘(点線枠内)が刻まれています。

「この石碑の銘は読まれましたか?」

筒形の玉垣が途切れた所に設置されている高さ3・40m、幅・奥行きともに0・60mの石碑の北面に右の銘(点線枠内)が刻まれています。

今までの石造物調査で、石碑に刻まれている銘は、過去の歴史を物語ると言う事実を学習して来ましたが、今まで数え切れない位この石碑の前を歩いていますが、足を止めて刻まれている銘を最後まで読み通した事があり

県道西宮港線 歩道美化完成記念

この道は「えべっさん筋」の愛称で広く親しまれ、毎年1月10日の西宮戎祭の前には歩行者専用道として全面開放され百万人にのぼる参詣者を集めているが、歩道の老朽化が著しかった。そこで、安全で快適な歩行空間の創造を目標に昭和62年度から組合せブロックによる歩道舗装工事に着手し、西宮市を始めとする地元の皆様の協力を得て、平成3年9月に総延長1000mの改修工事が完了した。ここに工事の完成を記念し石碑を設置する。

平成4年3月 兵庫県



ませんでしたので、自戒を込めて銘を拾って見ました。(写真・文||栗野光一)

2014年おめでとうございます



Jockey of Artemision (150-146 BC)
アテネ国立考古学博物館蔵=Photo:kinugasa



西宮歴史調査団通信 2014年 2月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

かな文字に四苦八苦

★…南 好廣

調査団に入団して、月2回「萬延元庚申年浄土宗門帳」をノートに筆写して

いる。屋号のくずし字に悩み、女性名のかな二文字の判読に四苦八苦している。



木の葉一枚一枚を記録していくような作業である。その先に、どのような木立や森の姿が見えようか。木の葉集めの地味な作業を続けたい。

てくるのか不明である。

「万延元年」とは、三月に江戸で桜田門の事件が起こり「幕末」が動き出した年である。六年後の慶応二年には、西宮で始まった打ちこわしが摂津一円から大坂三郷へ広がったという記録がある。

「古文書班」からの報告

神戸市立博物館の場合

★…横山 忠範

一昨年末より入団、当班に所属する者ですが、今のところ出席の機会が少なく、他メンバーの方々のような調査内容の分析は難しいので、以前自分が務めた博物館ボランティアの紹介に代えさせて頂きます。

神戸市立博物館では、ボランティア(正式名称・学習支援交流員)も毎年、職員同様の更新研修を義務付けられ、

学芸課事業係の一員として主体性を強く求められます。

名前の通り市民の学習・交流を広く促進するのが目的である為、館内ワークショップと周辺史跡案内イベントの企画主催、それらに関わる体験プログラム・学習ツール開発を中心に、来館する学生団体対応や雑務の手伝い(ポスタル発送・アンケート集計・行事受付など)、館外でも市内学校への出張授業で指導補助にあたりました。

「次回の古文書班担当号に続く」

この屋号、なんと読みますか

★…多々良 さゆり

「言床」屋と読める?

65 66

「兵庫」屋と読む

床 シヨウ トカ

「床」と同字。

床床床床

って床って言えば あきらめて質問

上の字は、何と言う屋号でしょうか? くずし字解説辞典と、くずし字用例辞典を駆使した結果「言床屋」と読みました。??? どう考

えても違っている気がしません。絶対違う!! でも一回そう思ってしまうと、どんどんそう見えてくる。上の字なんて66番にそっくりじゃない。下の字だ

したら正解は「兵庫屋」でした。・・・言われても分からない。次からはこういう字が出てきたら「兵庫屋」って読むのみです。苦難の日々は続きます。

庫 クラ 庫庫庫庫

日々は続きます。

西宮歴史調査団通信 2014年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内=662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

「橋梁班」からの報告

橋と橋梁木

★ …… 清水 貞夫

いま、船坂川には対照的
な、ふたつの橋が見られる。ひとつは、国道一七六号線にある船坂川1号橋であり、ひとつは市道山9号線にある、鍋倉橋である。

一方の市道の橋は、谷間の底にあつて日中でも、ほとんど車や人の往き来は見られない。コンクリートとガ

のように対照的なふたつの橋だが、国道の方は、もはや橋というより道路そのものである。やはり市道の橋の方が、橋らしい橋だと思えるのである。

ドレールで造られているが、長年にわたり風雨に曝され、高欄の下には苔が生えている。当然のこととはいえ、それでも川を跨いでひっそりと架かっている。



老ヶ岩が予想以上にデンジャラスだった件

★ …… 多々良 さゆり

山口町船坂でバスを降りて船坂川を遡っていくと、道の右側に老ヶ岩についての立て札が立っている。それによるとこの岩は過去様々な祟り現象を起こしているらしい。材師がノミを当てると血が噴き出し、気が狂って死んでしまったり、そのまま岩に飲み込まれてしまったりしたというのだ。さらに恐ろしいことに、触ると早く老け込むらしい。目を向けるとなるほどいかにも

石 登ってくる途中、私はこの岩に触ったのか、触らなかったのか? …いくら考えても思い出せない。

触 ってね☆
チュ(・^*)
みたいな岩が行く手に